

医療と人をつなぐ やさしいテクノロジー。 Ubieが描く“未来の健康”とは？

テクノロジーの力で人と医療を結ぶヘルステック企業『Ubie』にクローズアップ。医療先進国日本から紡ぎ出される、人と医療とテクノロジーの新たな関係値を紐解きます。



Hello, Healthy World. テクノロジーで医療をもっと身近に

やってきたのは“Hello, Healthy World.”を経営ビジョンに、テクノロジーで人々を適切な医療に案内することを目指すヘルステック企業『Ubie』の本社オフィス。2017年設立のスタートアップ企業でありながら、日本とアメリカを拠点に月間1200万人以上が利用する一般生活者向け症状検索エンジン「ユビー」や、1800超の施設で導入される医療機関向けサービス「ユビーメディカルナビ」などを展開する、まさに目下急成長中のITヘルスケア時代の寵児です。ヘルスメーターやスリープトラッカーなどのスマートデバイスを取り扱うHESTA LIFEにとっても、これはとっても興味のあるところ。是非とも詳しくお話を聞きたいと、本メディア運営母体「HESTA大倉」広報担当・白石とともに、そのお膝元を訪ねます。

医師の目線でプロダクトを開発。Ubieで医療の入口を変えていく

ご登場いただいたのは、現役の呼吸器内科医師であり、Ubie社員としてプロダクト開発部署にも籍を置く折茂圭介さん。医師としての経験を重ねる中で、もっと多くの人が適切な医療にたどり着ける仕組みが必要だと感じ、2022年より同社メンバーに加わったそうです。「私と同じように現役医師でもある社員が、現在弊社には、10名ほど在籍しています。元々「Ubie」は、エンジニアの久保と内科医師の阿部が、2017年に立ち上げた会社なんです。きっかけは、2年前から血便があったものの受診せず、その結果、40代で亡くなってしまった患者さんと阿部が出会ったこと。阿部は「テクノロジーの力を活用すれば、こういったケースも未然に防ぐことができるのではないか」という想いで、高校の同級生であり、その時既にエンジニアの立場からAI×医療という事業

構想を抱いていた久保と合流し、共同で創業したんです」。折茂さんは続けます。「私自身、医師として同じことを感じて応募しましたし、私以外の医師メンバーもみな、同じような考えで参画しているはず。もちろん医師以外の社員も全員が共有している想いではありますが、そういう理由で、うちには現役医師が多数在籍しているんです」。なるほど、だからそのサービスクオリティの高さ。一般層から医療機関まで、厚い支持を受けているのも頷けます。実際、開発される各種サービスには現役医師ならではの知見が注ぎ込まれているだけでなく、医療機関向けサービス「ユビーメディカルナビ」、生活者向けサービス症状検索エンジン「ユビー」に組み込まれるAIは、合計5万本もの医学論文に基づいて作成されたデータベースが活用されているそう。



指先ひとつで医療とつながる、ヘルスケアへの道標

医療にアクセスするための最初の一步を、スマホひとつで気軽にサポートしてくれる生活者向けサービス「ユビー」。自分の症状を検索できるだけでなく、受診先を調べることもできるその機能は、まさにデジタル時代におけるヘルスケアへの道標。「例えば、体のどこかが痛かったとしても、それがどこに紐づいているのかわからないと、受診先に困ることも多いですね。そういうときでも『ユビー』を使えば、関連する診療科を調べてくれる。選択肢を提示できるUI設計は、開発チームのこだわりが詰まってるんですよ」と折茂さん。というわけで白石さんも、実際に「ユビー」を体験。スマホ画面を操作しながら、「医療用語じゃなくて、普段の言葉で書いてあるのがすごくありがたいです。こういう優しい設計が、医療との距離を縮めてくれるんですね」と実感を口にします。ちなみに、社名でありサービス名でもある「Ubie (ユビー)」の由来は、「指 (ユビ) で医療にアクセスする」が由来。「医療をもっと身近にしたい。だからこそ、名前もUIもシンプルさとわかりやすさにこだわってるんです」と折茂さん。語感のやさしさも含めて、使う人の立場を何よりも大切にするネーミングです。

Ubieが描くテクノロジーと人が共に進む未来へ

最後に折茂さんは、こう締めくくってくれました。「私たちが目指すのは、専門的な知識がなくても、自然と健康に向き合える社会の創生。そのためにテクノロジーを、人にやさしい道具として活かしていきたいんです」。医療とテクノロジーが手を取り合い、人々の健康的な暮らしに寄り添う未来。そんな大きな一歩を、『Ubie』はすでに踏み出しています。指先ひとつからはじまる、新しい健康との付き合い方。HESTA LIFEはこれからも『Ubie』の活動と躍進を応援していきます。

Ubie株式会社について
詳しくはこちらから



治療後
また膝が
痛みだした

つらい膝の痛みに

膝の痛みが
引かない

再生医療

gMSC®1-Aによる新しい治療

こんな症状はありませんか？



- ☒ 痛み止めで飲んでも、湿布を貼っても、注射をしても膝の痛みが続いている
- ☒ 過去に靱帯損傷や半月板損傷の治療や手術を受けているが、**また膝が痛くなってきた**
- ☒ スポーツする時に**膝が痛い** ☒ 膝をケガしてから、**膝の痛みがおさまらない**
- ☒ 過去に事故で膝をぶつけた、あるいは膝をひねってから**痛みが続いている**
- ☒ 膝を動かすと、引っ掛かる感じやずれるような感じなど、**違和感がある**

その痛み、**膝の軟骨**が傷ついているかも!?

軟骨は一度傷つくと自然には治らない…

そこで! 現在注目されているのが

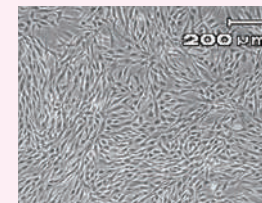
MSC^{*}(滑膜由来)を用いた再生医療

*MSC = Mesenchymal Stem Cell

gMSC®1-Aの特徴

間葉系幹細胞 (MSC)

成人の体内の骨髄や脂肪、滑膜などから取得でき、遺伝子操作不要。がん化などが起きないと言われています。



三次元人工組織

動物由来の足場材料等を使わずに三次元構造を作ったもの。ゲル状で可変的、かつ、生物接着性があり、容易に患部に接着するため移植が容易。



MSC再生医療のポイント

①高い安全性

下記2点の特徴により、他の再生医療に比べ高い安全性を保っております。
●ヒトやウシ由来の血清を用いない培養法のため、患者様の血清を用いる(採血の負担)、動物由来の不純物の混入(狂牛病などのウイルスリスク等)が少ない
●移植細胞用の人工の足場材料(スキャフォールド)を用いる必要がない(動物由来成分に伴うリスク)

②軟骨再生による長期的な効果

通常、一度傷ついた軟骨は簡単には再生しないことが知られていますが、本治療では、自家gMSC®1-Aを軟骨損傷部位に直接貼り付けるように移植することで、軟骨の再生が期待されます。

臨床試験(膝関節における軟骨損傷及び離断性骨軟骨炎を対象とした同種滑膜間葉系幹細胞由来三次元人工組織(gMSC1)移植の有効性及び安全性をマイクロフラクチャー(MFX)法を比較対照として評価する第Ⅲ相無作為化臨床試験「JRCT1080223548」において、軟骨再生を示唆するデータが得られています。

再生治療で健康・快適な暮らしを。

HESTA大倉は、AIxIoTによって未病状態を早期に発見し、医療支援に直結させるシステムを各住居に標準装備しています。最新の治療技術をお届けすることも弊社の役割と考え、ツーセル様と提携しました。お客様の中にも「膝の痛みで外出もままならない」とお悩みを持たれる方々が多いです。ツーセル様の軟骨再生技術で、より多くの方々に笑顔になって貰いたい。国内だけでなく、海外の医療機関からも注目頂いています。

HESTA大倉 代表取締役社長 鬼塚 友章



釧路孝仁会記念病院が基幹病院としてすでに治療をスタートしており、8月には大阪の病院でも治療が開始される予定です。詳細はホームページでお知らせいたします。MSC再生医療の詳細についてもホームページをご覧ください。